

みちの記

森鷗外

青空文庫

明治二十三年八月十七日、上野より一番汽車きしゃに乗りていず。途
 にて一たび車を換かうることありて、横川にて車はてぬ。これより
 鉄道馬車雇ういて、薄氷嶺うすいとうげにかかる。その車は外を青「ペンキ」
 にて塗ぬりたる木の箱にて、中なかに乗りし十二人の客は肩腰かたこし相触あれて、
 膝ひざは犬牙けんがのように交錯こうさくす。つくりつけの木の腰掛こしかけは、「フラ
 ンケット」二枚敷敷きても膚かわを破やぶらんとす。右左みぎひだりに帆木綿ほもめんのとばり
 あり、上下うへしたにすじがね引ひきて、それを帳との端はしの環わにとおしてあけ
 たてす。山路さんろになりてよりは、二頭ふたごうの馬喘あえぎ喘あえぎ引ひくに、軌幅きふく極ごく
 めて狭せまき車の震ふること甚ししく、雨あめさえ降りて例れいの帳閉とじたれば息いき
 籠こもりて汗あせの臭か車かに満みち、頭痛づうとうみ堪たえがたし。嶺たかねは五六年ごねん前に躓つまず

えしおりに似ず、泥でいねぐるぶし濘ぬ蹠づを没す。こは車のゆきき漸く繁くなり
ていたみたるならん。軌道きどうの二重になりたる処にて、向いよりの
車を待合わすこと二度。この間長きときは三十分もあらん。あた
りの茶店より茶菓子ちやがしなどもて来れど、飲食のみくわむとする人なし。下
りになりてより霧きり深く、背後うしろより吹く風寒かぜむく、忽夏を忘れぬ。さ
れど頭のやましきことは前に比べて一層を加えたり。軽井沢停かるいさわてい
車場しやじょうの前にて馬車はつ。恰も鈴鐸れいたく鳴るおりなりしが、余りの
苦しさに直には乗り遷らず。油屋あぶらやという家に入りて憩う。信しん
州ゆうの鯉はじめて膳に上る、果して何の祥にや。二時間眠りて、
頭やや軽き心地す。次の汽車に乗ればさきに上野うえのよりの車にて室
を同うせし人々もここに乗りたり。中には百年も交りたるように

親みあうも見えて、いとにがにがしき事に覚えぬ。若し方今のありさまにて、傾蓋けいがいの交はかかる所にて求むべしといわばわれ又何をかいわん。停車場は蘆葦ろいじんちよう人長の中に立てり。車のいずるにつれて、蘆あしの葉はまばらになりて桔梗きぎようの紫なる、女郎花おみなえしの黄なる、芒花おばなの赤き、まだ深き霧の中に見ゆ。蝶ちよう一つ二つ翅重つばおもげに飛び。車漸く進みゆくに霧晴る。夕日木梢ゆうひこずえに残りて、またここかしこなる断崖だんがいの白き処を照せり。忽虹にじいちどう一道ありて、近き山の麓より立てり。幅きわめて広く、山麓さんろくの人家三つ四つが程を占めたり。火点ひともしごろ過ぎて上田うえだに着き、上村に宿る。

十八日、上田を発す。汽車きしゃの中等室にて英吉利婦人あに逢う。「カバン」の中より英文の道中記どうちゆうき取出して読み、眼鏡めがねかけて車

窓の外の山を望み居たりしが、記中には此山三千尺とあり、見る所はあまりに低しなごい。実に英吉利人はいづくに來ても英吉利人なりと打笑いぬ。長野にて車を下り、人力車雇いて須坂に來ぬ。この間に信濃川にかけたる舟橋あり。水清く底見えたり。浅瀬の波舳に触れて底なる石の相磨して声するようなり。道の傍には細流ありて、岸辺の蘆には鼓子花からみつきたるが、時得顔にさきたり。その蔭には織き腹濃きみどりいろにて羽漆の如き蜻牛挽きて山田へ歸る翁ありて、牛の背借さんという。これに騎りて須坂を出ず。足指漸く仰ぎて、遂につづらおりなる山道に入りぬ。ところどころに清泉迸りいでて、野生の撫子いと麗しく咲きたり。その外、都にて園に植うる滝菜、水引草など皆

野生す。しよりりようというかつしよく 褐色の蜻蜒あり、群をなして飛
 べり。日暮るる頃山田の温泉に着つきぬ。ここは山のかいにて、公
 道を距ること遠ければ、人げすくなく、東京の客などは絶て見え
 ず、僅に越後などより来りて浴する病人あるのみ。宿とすべき家
 を問うにふじえやというが善しという。まことは藤井屋なり。主
 人驚きて簷端傾きたる家の一間のきは 払いて居らす。家のつくり、中庭
 を囲みて四方に低き楼あり。中庭より直に楼に上るべき梯かけた
 るなど西洋の裏屋の如し。屋背は深き谿に臨めり。竹樹茂りて水
 見えねど、急湍の響は絶えず耳に入る。水桶にひしやく添えて、
 縁側に置きたるも興あり。室の中央に炉あり、火をおこして煮
 焚す。されど熱しとも覚えす。食は野菜のみ、魚とては此辺の溪

にがわ

川にて捕らるるいわなというものの外、なにもなし。飯のそえものに野菜煮によといえ、砂糖さとうもて来たまいしかと問う。棒砂糖少し持てきたりしが、煮物に使つかわんこと惜おしければ、無しと答えぬ。茄子なす、胡豆いんげんなど醤油のみにて煮て来ぬ。鰹節かつおぶしなど加えぬ味頗むま旨し。酒は麴味を脱せねどこれも旨し。爛かんをなすには屎しゆび壺んの形したる陶器とうきにいれて炉の灰うずに埋む。夕餉ゆうげ果てて後、寐床しゆびのしろ恭うやうやしく求むるを幾許ぞと問えば一人一錢五厘という。蚊かなし。

十九日、朝起きて、顔洗かあらいうべき所やあると問えば、家の前なる流ながれを指さしぬ。ギョオテが伊太利紀行もおもい出でられておかし。温泉めくを環りて立てる家数三十戸ばかり、宿屋やどやは七戸のみ。湯壺は

去年まで小屋掛こやがけのようなるものにて、その側まで下駄げたはきてゆき、
 男女ともに入ることなりしが、今の混堂立ちて体裁ていさいも大に整ととのい
 たりという。人の浴するさまは外より見ゆ。うるさきは男女皆湯
 壺の周圍に臥して、手拭を身に纏い、湯を汲くみてその上に灌そそぐこ
 となり。湯に入らんとするには、頸くびを超こえ、足を踏ふみて進まざれ
 ば、終日側に立ちて待てども道開かぬことあり。男女の別は、男
 は多く仰あおぎふし、女は多くうつふしになりたるなり。旅店の背うしろな
 る山に登りて見るに、処々に清泉あり、水清せいれつ冽れつなり。半腹に鳳
 山亭と匾あずまやしたる四阿屋の簷傾のききたるあり、長野辺まで望見るべし。
 遠山の頂には雪を戴いたきたるもあり。このめぐりの野は年毎に一た
 び焚やきて、木の繁しげるを防ぎ、家畜飼う料に草を作る処なれば、女お

郎花みなえし、桔梗きぎよう、石竹せきちくなどさき乱れたり。折りてかえりて筒つつに
 さしぬ。午後泉に入りて蟹かになど捕えて遊ぶ。崖がけを下りて溪川の流
 に近づかんとしたれど、路あまりに嶮けわしければ止みぬ。溪川の向
 いは炭焼すみやく人の往来する山なりという。いま流を渡りて来たる人
 に問うに、水浅しといえり。この日野山ゆくおりに被かぶらばやお
 もいて菅笠すげがさ買いぬ。都にてのようになの立たん憂はあらし。

二十日になりぬ。ここに足を駐とどめんとときようおもい定めつ、爽あ
 さまだき

且且かねてききしいわなという魚売さかなりに来たるをかかう、五尾十五
 錢ふもと。鯉ふもとも麓なる里より持もてきぬというを、一尾買いてゆうげの時
 まで活いかしおきぬ。流石さすがに信濃の国なれば、鮒ふなをかしらにはあらざ
 りけり、屋背うしろの溪川は魚栖すまず、ところのものは明礬めんばん多ければ

なりという。いわなの居る河は鳳山亭より左に下りたる処なり。そこへ往^ゆかんとて菅^{すげ}笠^{がさ}いただき草鞋^{わらじ}はきて出でたつ。車前草おい重りたる細径^{こみち}を下りゆきて、土橋^{どばし}ある処に至る。これ魚栖めりという流なり。苔^{こけ}を被^おぶりたる大石^{おおいし}乱^{らん}立^{りつ}したる間を、水は潜りぬけて流れおつ。足いと長き蜘蛛^{くも}、ぬれたる巖^{いわ}の間をわたれり、日暮るる頃まで岩に腰^{こし}かけて休^{やす}らひ、携^たえたりし文など読^よむ。夕餉^{ゆうげ}の時老女あり菊の葉、茄子など油にてあげたるをもてきぬ。鯉、いわなと共にそえものとす。いわなは香味鮎^{こうみあゆ}に似たり。

二十一日、あるじ来て物^{ものがたり}語^ごす。父^{ちち}は東京にいでしことあれど、おのれは高田より北、吹上より南を知らずという。東京^{かく}の客^{かく}のここへ来ることは、年^{とし}に一たびあらんなどいえど、それも山田

へとてにはあらざるべし。きよう今までの座敷ざしきより本店のかたへ
 遷うつる。ここは農夫の客に占しめられたりしがようやく明あきしなり。
 隣となりの間に鬚ひげ美るしき男あり、あたりを憚はばらず声こえ高たかに物語するを聞
 くに、一ふた言こと三言みことの中に必ず県けん庁ちようという。またそれがこの地
 のさだめかという代りに「それがこの鉱こう泉せんの憲けん法ぼうか」などい
 う癖くせあり。ある時はわが大学に在りしことを聞き知しりてか、学がく士し博は
 士かせなどという人々三さん文もんの価あたいなしということしたり顔がおに弁べんじぬ。さ
 すがにことわりなきにもあらねど、これにてわれを傷きづけんとおも
 うは抑そ迷まよならずや。おりおり詩歌しかなど吟ぎんずるを聞くに皆みな訛まれり。
 おもうに牟むルヘルム、ハウフが文に見えたる物学ぶつがくびし猿さるはかくこ
 そありけめ。唯彼猿はそのむかしを忘わすれずして、猶なほ亞米利加の山

に栖すめる妻むすめの許もとへふみおくりしなどいと殊しゆ勝しょうに見みゆる節ふしもありしが、この男おとこはおなじ郷さとの人ひとをも夷えびすの如ごとくいいなして嘲あざけるぞかたはら痛いたき。少女しょうじよの挽物ひきもの細工さいいくなど籠かごに入れて売うりに来るあり。このお辰おちんまだ十二三じふにさんなれば、われに百円ひゃくえんづつみ抛なげだ出ださする憂うれいもなからん。

二十二日じふににち。雨あめ。目の前まへなる山の頂いただき白雲はくうんにつつまれたり。炉ろに居い寄りてふみ読よみなどす。東京とうきやうの新しん聞ぶんやあると求もとむるに、二日前ふたにちまえの朝野新聞あさのしんぶんと東京公論とうきやうこうろんとありき。ここにも小しょう説せつは家いへごとに読よめり。借かりてみるに南翠外史なんすいがいしの作さく、涙香小史なみかしょうしの翻ほん訳やくなどなり。二十三じふさん日にち、家いへのあるじに伴ともなわれて、牛うしの牢らうという溪間たにまにゆく。げに此流こゝがれには魚栖うおすまずというもことわりなり。水みづの触ふる所ところ、砂し

やせき
 石皆赤く、苔などは少しも生ぜず。牛の牢という名は、めぐりの石壁削りたるようにて、昇降いと難ければなり。ここに来るには、横に道を取りて、杉林を穿ち、迂廻して下ることなり。これより鳳山亭の登りみち、泉ある処に近き茶毘所の迹を見る。石を二行に積みて、其間の土を掘りて竈とし、その上に桁の如く薪を架し、これを棺を載するところとす。棺は桶を用いず、大抵箱形なり。さて棺のまわりに糠糶を盛りたる俵六つ或は八つを豎に立掛け、火を焚付く。俵の数は屍の大小により殊なるなり。初薪のみにて焚きしときは、むら焼けになることありて、火箸などにてかきまぜたりしが、糠糶を用いそめてより、屍の燃ゆるにつれて、こぼれこみて掩えば、さる憂なしといえり。

山田にては土葬どそうするもの少く、多くは荼毘しにんするゆえ、今も死人しにんあれば此竈つかを使うつかなり。村はずれの薬師堂の前にて、いわなの大なるをか買やどいて宿の婢わらに笑わらわる。いわなは小なるを貴たかび、且ところの流にて取りたるをよしとするものなるに、わが買かいもてかえりしは、草津のいわなの大なるなれば、味定めて悪あしからんというこころ。嘗こころみるに果して然り。ここより薬師堂の方を、六里ばかり越ゆけば草津に至るべし、是れ間道かんどうなり。今年の初、歐洲人雪を侵おかして越こえしが、むかしより殆たいていためしなき事とて、案内者あんないしやもたゆたいぬと云。

廿四日、天氣好てんきよし。隣となりの客つとめて声高こわだかに物語ものがたりするに打うち驚どろきて覚さめぬ。何事なにごとかと聞けば、衛生えいせいと虎列拉これらとの事なり。

衛生とは人の命延ぶる学なり、人の命長ければ、人口殖えて食
 足らず、社会のためには利あるべくもあらず。かつ衛生の業盛
 になれば、病人あらずなるべきに、医のこれを唱うるは過て
 り云々。これ等の論、地下のスペインサアを喜ばしむるに足らん。
 虎列拉には三種ありて、一を亜細亞虎列拉といい、一を欧羅巴
 虎列拉といい、一を霍乱という、此病には「バチルレン」とい
 うものありて、華氏百度の熱にて死す云々。これはペツテンコオ
 フエルが疫癘学、コツホが細菌学を倒すに足りぬべし。また
 恙の虫の事語りていわく、博士なにがしは或るとき見に来しが何
 のしいだしたることもなかりき、かかることは処の医こそ熟知
 りたれ。何某という軍医、恙の虫の論に図など添えて県庁にたて

まつりしが、こはところの医のを 剽窃ひょうせつしたるなり云々。かか
 ることしたり顔がおにいい誇るも例の人の癖くせなるべし。おなじ宿やどに木
 村篤迎、今新潟始審裁判所の判事勤つとむる人あり。白井六郎が事を
 つまびらかに詳つまびらかにに知りとて物語す。面白おもしろきふし一ツ二ツかきつくべし。当
 時秋月には少壮しょうそう者の結むすべる隊たいありて、勤王党しんおうと称しょうし、久留米
 などの応援おうえんを頼たのみて、福岡より洋式ようしきの隊たい来るを、境さかいにて拒こみ、
 遂ついにに入れざりしほどの勢いきなりき。これに反はん対たいしたる開化党は多
 小年とし長けたる士しなりしが、其首かしらにたちて事をなす学者二人ありて、
 皆陽明学者なりし、その一人は六郎が父なりき。勤王党の少壮者
 二手に分かれて、ある夜彼二人の邸やしきにきりこみぬ。なにがしとい
 う一人の家を囲かこみたるおり、鷄にわとりの埒ねぐらにありしが、驚おどきて鳴なきしに、

主人きつねすは狐の来しよと、素肌すはだかにて起き、戸を出ずる処を、名乗なの
 掛りかけて唯一ただひとやり一槍に殺しぬ。六郎が父は、其夜すい酔臥がしたりしが、枕まくら
 もとにて声掛りけられ、忽ちはね起きて短たん刀とう抜きぬきはなし、一たち
 斫きられながら、第二第三の太刀を受けとめぬ。その命を断ちしは
 第四の太刀なりき。六郎が母もこの夜殺されぬ。はじめ家族まで
 も傷きづけんという心はなかりしが、きり入りし一いち同どうの鳥銃放ちて
 引上げたるとき、一人足らざりしかば、怪みて白井が邸にかえり
 て見しに、此男六郎が母に組くまれて、其場を去り得ざりしなり。
 引放ひきはなたんとするに、母劇はげしくすまいて、屈けする気色しきなければ、
 止むを得ずして殺しぬ。六郎が祖父は隠居いんきよ所にありしが、馳出はせい
 でて門のあきたるを見て、外なる狼藉ろうぜき者ものを入れじと、門を鎖とぎさ

んとせしが、白刃振りて迫せまられ、勢敵いきわんぎしがたしとやおもいけん、
 また隠居所に入りぬ。六郎が母を殺しし人は、今もながらえたり。
 六郎が父殺しし人の、一瀬なりしことは、初知るものなかりしが、
 故ことらに迹あとを滅けさんと、きりこみし人々、皆其刀を礪とがせし中に、
 一瀬が刀の刃は二個処いちじるしくこぼれたるが、白井が短刀のは
 のこぼれに吻ふんごう合あしたるより露あらわれにき。六郎が父の首くびは人々持
 ちかえりしが、彼素肌にてつき殺されし人は、ずだずだに切きられ
 て、頭くたさえ砕くだけたりき。木村氏はそのおり白井の邸に向いし一人
 なりしが、刃にちぬるに至らず、六郎が東京に出でて勤きん学がくせん
 といいいしときも、親類しんるいのちなみありとて、共に旅立たびだつこととな
 りぬ。六郎は東京にて山岡鉄舟の塾じゆくに入りて、撃げ剣けんを学び、木

村氏は熊谷の裁判所にしゅつきん出勤したりしに、或る日六郎尋ねきて、
 撃劍の時誤りてあやま肋骨あばらぼね一本折りたれば、しばしおん身が許もとにて
 保養ほようしたしという。さて持もてきし薬くすりなど服ふくして、木村氏のもとに
 ありしが、いつまでも手を空むなしくしてあるべきにあらねば、月給八
 円の雇吏やといとしぬ。その頃より六郎酒色しゆしよくに酖ふけりて、木村氏に借し
 銭やくせん払はわすること屢しばしば々なりなり。ややありて旅費りよひを求もとめてここを
 去りぬ。後に聞けば六郎が熊谷に來しは、任所にんしよへゆきし一瀬が
 跡追あとおいてゆかんに、旅費なければこれを獲えぬとてなりけり。酒色
 に酖ふると見えしも、木村氏の前をかく繕つくいしのみにて、夜な夜な
 撃劍のわざを鍛きたいぬ。任所にては一瀬を打つべき隙ひまなかりしかば、
 随したがいて東京に出で、さて望とを遂げぬ。その折の事は世のよく知る

所なれば、ここにはいわず。白井六郎も今は獄ごくを出でたり。獄中にて西教かたむに傾かたむきたりといえは、彼カコルシカ人の「ワンデツタ」に似にたる我邦復讐ふくしゆうの事、いま奈何いかにおもうらん。されど其母殺したりという人は、安やすき心もあらぬなるべし。きようは女郎花おみなえし、桔梗ききようなど折来おりきたりて、再び瓶かめにさしぬ。

二十五日、法科大学の学生なる丸山という人訪まいく。米子の滝たきの勝しょうを語かたりて、ここへ来きし途みちなる須坂すざかより遠とほからずと教おしえらる。滝の話は、かねても聞きしことなれど、往ゆて観みんとおもう心切なり。

二十六日、天陰くもりて霧きりあり。きようは米子に往かんと、かねて心がまえしたりしが、偶々たまたま信濃新報を見しに、処々の水害にか

えり路の安からぬこと、かずかず書きしるしたれば、最早京もはやに還るべき期も迫りたるに、ここに停とどまること久しきにすぎ、思ひかけず期に遅おくるることなどあらんも計られずと、危あやぶみおもいて、須坂に在りて待またんといわれし丸山氏のもとへ人をやりて謝し、急いそぎて豊野の方へいでたちぬ。この道みちは、はじめ来しおりの道よりは近きに下り坂なれば、人力車にてゆく。小布施という村にて、しばし憩いこいぬ。このわたりの野に、鴨頭草のみおい出でて、目及びかぎり碧あおきところあり、又秋萩の繁しげりたる処あり。麻畑そばの傍を過ぐ、半ば刈かりたり。信濃川にいでて見るに船橋断たえたり。小舟にてわたる。豊野より汽車に乗りて、軽井沢にゆく。途次線路の壊やぶれたるところ多し、又仮かりに繕つくろいたるのみなれば、そこに來る

ごとに車のあゆみを緩くす。近き流を見るに、濁浪岸を打ちて、堤を破りたるところ少からず。されど稲は皆恙なし。夜軽井沢の油屋にやどる。

二十七日、払曉荷車にぐるまに乗りて鉄道をゆく。さきのにりし箱に比ぶれば、はるかに勝れり。固より撥条バネなきことは同じけれど、壁なく天井てんじょうなきために、風のかよいよくて心地あしきことなし。碓氷嶺過ぎて横川に抵いたる。嶺の路ここかしこに壊やぶれたところ多かりしが、そは皆かりに繕いたれば車通いしなり。横川よりゆくての方は、山の頰くすれおちて全く軌道を埋うずめたるあり、橋のおちたるありて、車かよわずといえは、鞋わらじはきていず。軌道より左に折れてもとの街道をゆくに、これも断たえたる処あれば、山を躪こ

え溪たにを渡りなどす。松井田より汽車に乗りて高崎に抵いたり、ここに乗りかえて新町につき、人力車を雇やといて本庄にゆけば、上野までの汽車みち、阻礙なしといえり。汽車は日に晒さらしたるに人を載おすることありて、そのおりの暑あつき堪えがたし、西国にてはさぞ甚おしからん。このたびの如き変ある日には是非ぜひなけれど、客をあまりに多く容いるるは、よからぬことなり。また車丁等には、上、中、下等の客というころなくして、彼は洋服ようふくきたれば、定めてありがたき官員ならん、此は草鞋わらじはきたれば、定めていやしき農夫ならんという想そつぞう像のみあるように見うけたり。上等、中等の室に入りて、切符きつぷしらぶるにも、洋服きたる人とその同行者とは問とわずして、日本服のものはもらすことなかりき。また豊野の停車

場にては、小荷物預けんといひしに、聞届けがたしと、官員が
 ほしていいしを、痛く責めしに、後には何事をいいても、いらえ
 せずなりぬ。これとはうらうえなるは、松井田にて西洋人の乗り
 しとき、車丁の荷物を持ちはこびたると、松井田より本庄まで汽
 車のかよわぬ軌道を、洋服きたる人の妻子婢妾にとおらせ、猶飽
 きたらでか、これを空きたる荷積汽車にのせて人に推させたるな
 どなりき。渾てこの旅の間に、洋服の勢力あるを見しこと、
 幾度か知られず。茶店、旅宿などにてても、極上等の座敷のたたみ
 は洋服ならでは踏みがたく、洋服着たる人は、後に来りて先ず飲
 食することをも得つべし。茶代の多少などは第二段の論に
 て、最大大切なるは、服の和洋なり。旅せんものは心得置くべき

ことなり。されど奢おごしるは益なし、洋服にてだにあらば、帆木綿ほもめんにてもよからん。白き上衣わきの、腋わきの下早や黄ばみたるを着たる人も、新しき浴衣ゆかた着たる人よりは崇たつとばるるを見ぬ。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆15 旅」作品社

1983（昭和58）年9月25日第1刷発行

1995（平成7）年5月30日第24刷発行

底本の親本：「鷗外全集 第二二巻」岩波書店

1973（昭和48）年8月

初出：「東京新報」

1890（明治23）年8月～9月

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2007年7月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

みちの記

森鷗外

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>